

---

# WANT ~川口利成の12月

馬河童

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WANT〜川口利成の12月

### 【Nコード】

N4619E

### 【作者名】

馬河童

### 【あらすじ】

TVゲームにハマる人間を描いた作品。プレイステーション初期時代の頃に書いたので、かなり現在と事情が違いかもかもしれません。しかも若干マニアックな内容なので、人によっては全く理解不能かも…。また、ある意味「感覚麻痺2」的作品です。

## 第1回

「ふえーっ、疲れたあ……。寒うつ……」

12月7日の冬の寒い夜、バイト先のゲームセンターから帰宅した川口利成は、玄関から家の中に入るやいなやドツカと腰を下ろした。冷え込んだ部屋の中、凍える身体が自然と彼の両手を擦らせる。ところが彼はストーブのスイッチをオンにするよりもまずTVの電源を入れた。そしていつものニュースキャスターの顔が映ったチャンネルを、何も映らないガースとノイズ音のする画像に切り替えると、自分の足元にあるゲーム機の電源スイッチを足の親指で押していた。TV画面から機械的な音楽が流れてきて、利成がスタートするのを待ち受ける。すると彼は服も着替えず、胡坐を掻いて、食い入るようにTVに向かった。手にはゲーム機のコントローラーが握られ、彼は虚構世界の住人に早変わりしていた。もはや12月の寒さなど微塵も感じていないようだった。

ご覧の通り、彼の趣味はTVゲーム、いや趣味といっでは多少の語弊がある。彼にとってTVゲームは生きがいにも等しかった。食費を削ってでもゲームソフトは買い漁っていた。友達はいないこともないが、人間以上にゲームが友人という男だった。

ゲームをしながら利成は、帰りがけに買ってきたであろう紙の袋を手にして、その中身を取り出した。それはゲーム雑誌だった。パラパラと紙面をめくりだした彼の手があるページで不意に止まる。そしてTV画面そっちのけで雑誌記事に釘づけになった。

「な、なにいつ!？」

他に誰もいない部屋に彼の声が響く。

「マジかよ、『ファイナルドラゴン3』今月発売するなんて……」

それは一般的社会観念から見ると大したことではないのだが、彼にとっては一大事だった。師走、それも年末年始が近くなると、ゲーム会社はこぞって大作を発売する。トライアングル社の放つ超大

作『ファイナルドラゴン』シリーズは過去2作とも百万本以上の売り上げを記録している怪物ソフトで、その第3作目が出ることは半年前から告知されていたが、発売日が突如12月24日に決定したのだ。

利成が困っているのは、今月彼は既に3本のソフトを買っており、なお購入予定が6本もあり、金銭状況がリミットギリギリであることだった。そこへ絶対に買うと決めていた『ファイナルドラゴン3』がいきなり発売されるというので、彼としては身を切られるような思いであった。

利成は現在R教大学の3年生で、長野県の田舎町から東京へ出てきて一人暮らしをしていた。実家は細々と零細農家を営んでおり、とても利成が豊かな生活を送れる程の仕送りをする余裕はなかった。そのため彼は、自ら率先してアルバイトをして生活費を稼いでいた。もちろんその金の大半はゲームに消えていたが。

「うーん、こうなったら『バカッパクエスト』を辞めるか…、いやそれだったら『大津城240万石』か…、くそーっ！」

利成は購入計画の狂いにイラ立ち、己れの頭を掻きむしった。両手に引つ張られて抜け落ちた毛髪が絡み付く。この男にとってゲームは人生そのものに近かった。『人生ゲーム』というゲームが以前流行ったが、その言葉だけ捉えればそれは彼に相応しい冠と言えた。女性がきらびやかなアクセサリー等に執着するのと一緒に、彼のゲームへの情熱は凄まじいものがあつた。今まで欲しいと思ったゲームソフトは全て発売日に購入し、3〜4日間家に閉じ籠もって連日連夜徹夜を重ね、全精力を傾けてそのゲームをクリアする。その間食事はまるで非常食のように買い込まれたカップラーメンや菓子を中心となる。ゲームクリア後には脱け殻のようになり、顔はゲツソリとして、疲れで爆睡してしまうといった有様であつた。

2時間近く考え込み、利成はようやく計画を完成させた（その間も手は抜け目なくゲームを動かしていた）。彼は最終的に『バカッパクエスト』というロールプレイングゲームを切り捨てることにし

た。この日は深夜2時という、彼にしては珍しく早い時間にゲームを切り上げ、眠りに就いた。

翌朝、利成は9時に目を覚まし、パジャマから洋服に素早く着替えて玄関前の自転車に乗り込むと一目散に駆け出した。目的地はゲームショップである。それは『ファイナルドラゴン3』を予約する為だった。ところが近隣の店に着いてみて、利成は目を丸くした。

なんと長蛇の列が『ファイナルドラゴン3』の予約の為に出来上がっていたのだ。とりあえずその列に加わる利成。行列を構成する奴らは皆口々に『ファイナルドラゴン3』の噂をしていた。

「凄えグラフィックだよな！生きている人間みたいだし」

「ゲームシステムも今までにないタイプのものになるらしいぜ」

「それよりバトル画面見たかよ！迫力あったよなあ」

ゲームについての会話が交わされる中、一人で順番を待っていた利成は「そんなこと俺だつて知っているぜ」と内心では得意顔になっていた。別に知っていようが知るまいがどうということはないのだが、ゲームに関しては異様に負けず嫌いな一面を垣間見せるのが彼の特徴だった。

30分も並ぶと少しずつだが人の波が前の方に流れていった。ところがそれからしばらくすると店員が店内から出てきて、人数を数えるような素振りを見せ始めた。そして利成の前の人間のところで立ち止まり、

「皆様、朝早くからお並び頂きまして大変ご苦労さまでございます。申し訳ありませんがこちらの方で『ファイナルドラゴン3』の予約の方は締め切りとさせていただきます。大変申し訳ありません。今後ともウチの店をよろしくお願い致します」

と挨拶をした。定員より後方に並んでいた人間は、皆文句を吐き捨てパラパラと散っていく。収まりのつかないのは利成である。彼は店内に戻ろうとする店員を捕まえた。

「ちよつと！あと一人くらいどうにかならないんですか？」

「申し訳ありません。先程申した通りでございます。ウチが取れる

のは先着100名様でして、あなたの前の方で定員に達してしまつたのでございます」

「どうしてもダメ？」

「はい、大変申し訳ございません」

何度も頭を下げる店員を見て、利成はさすがに観念して自転車に乗り次に近い店へダッシュした。しかし結果は同じだった。予約は一杯で入る余地はなかった。それはどこの店へ行っても同様で、彼はこの日一日中あちこちとゲームを扱っている店を回ったが、その全てが予約が一杯でついに予約することが出来なかった。

「ちくしょう……」

夕闇の中、淋しく帰途を自転車で行く利成は哀愁を漂わせていた。どうにもならない状況に怒りと悲しみが同居していた。何かを殴りたい気分でもあり、その場で泣きたい気分でもあった。たかがゲームということなけれ。彼にとつてはそれ程重要なことなのだ。

とはいえ予約は出来なくても、まだ『ファイナルドラゴン3』が発売日当日に買えなくなった訳ではなかった。わざと予約を受け付けずに当日売りをするような店があるので、利成の望みはまだ断たれてはいないのだ。ただ予約状況から見て、相当に早くから並ぶ必要がありそうだった。

家に戻り、ゲームを始めた利成はイライラしつ放しだった。こんな時はゲームもうまくいかず、まるでバカにされてでもいるかのようである。ムシャクシャしてきた彼は寝ることにした。布団を敷いて、電気を消して、毛布に包まって目を閉じる。だが興奮してなかなか寝付くことが出来ない。寝よう寝ようと意識すればする程、頭は冴えて『ファイナルドラゴン3』のことが思い出されてくる。どうにもならないので利成は『ときどきメモリアル』という恋愛ゲームの女性主人公キャラクターとHすることを妄想して、自慰行為を繰り返して、その倦怠感から自然と眠りに就いた。

## 第2回

「うっ、臭っ!？」

目覚めた時、利成はまず部屋の異臭に気付いた。眠い目を擦りよく見るとティッシュが無造作に散らかっている。悪臭の原因は自分の体液だった。利成は何とも言えぬ情けなさを感じながら、落ちているティッシュを拾い集めゴミ箱に投げ込む。そして換気の為に窓を全開した。

「さ、寒っ……」

窓を開放した途端、寒気が部屋に流れこんできた。あまりの寒さに耐えきれなくなった利成は慌てて窓を閉じる。すると換気が不十分なため、部屋には何とも言えぬ臭気が残り漂った。朝から昨日のイライラに拍車がかかり、部屋にいるのも嫌になった利成は、時計が10時を回っているのを見て取ると外出することにした。行き先は彼の一番のお気に入りスポット、ゲームセンターだった。自分のバイトしている店へ行けば、3ゲーム(300円分)までは無料にしてもらえるのだ。金に余裕のない彼としては気晴らしにもってこいの空間であった。

「おはようございまーす!」

利成は入口付近で店長が掃除をしているのを見付けて、挨拶した。「おう、また来たのか。お前も好きだなあ。俺と店長代わるか?」

店長は利成のゲーム狂に半ば呆れたような表情を見せながらも、300円を手渡し、店内に招き入れた。

中に入ると利成は真っ先に『闘拳』という対戦格闘ゲームの前に座り、コインを投入してゲームを始めた。対戦格闘ゲームとは、同じゲーム機が2台表裏に並び、勝ち抜き戦のように次々と自分の正面に座って乱入してきたチャレンジャーと戦うゲームだ。そしてその大半が格闘技という題材を扱っていた。利成のスタートした『闘

拳』もその類のもので、空手家やプロレスラー、少林寺拳法使いなどが闘うゲームだった。

「うりゃうりゃあ！」

利成はゲームとなると真剣そのものなので、格闘ゲームなどをプレーすると、操作するキャラクターに成り切ってパンチやキックを繰り出しているつもりになって声が出る。それは端から見ると変な人そのもので、客が多い日などは周囲から異様な物のように見られることもあった。そんなことにはまるで構わず（というよりも気付いていない）彼は誰も挑戦してこない『闘拳』を、コンピューター相手にまず一回クリアした。

「ちつ、つまんないなあ、一人くらい挑戦して来ないのかよ」

『闘拳』に絶対の自信を持っている（自称プロ）利成は、相手が来ないことに拍子抜けしていた。

「しょうがないな、モグラでも使ってみるか」

ここで言う『モグラ』とはゲーム中に出てくるキャラクターのことで、モグラ拳法という訳のわからない技の使い手だった。利成は対戦相手も入って来ないので、その『モグラ』を初めて使用してみることにした。店長から貰った2枚目のコインを投入してゲームをスタートさせる。利成はキャラクターを『モグラ』で選択し、格闘を始めた。すると画面上に寝そべったモグラが姿を現わす。利成の操る『モグラ』は奇妙な動きでコンピューターの格闘家を攻撃する。「何だこいつ面白いなあ。今度から使ってみるか」

利成は『モグラ』の破天荒な格闘スタイルが気に入ったようで、対戦相手の来ないことなど忘れてゲームを楽しんでいた。利成の気分に合わせてるように、『モグラ』は順調に勝ち進んでいく。朝から憂鬱だった彼の気分も少しずつ晴れてきていた。『モグラ』のコミカルな動きは彼を和ませるのに十分な価値があった。

ところがその心の平穏はすぐに乱された。プレイ中の画面が反転し、「Here comes a challenger!!」と

いう文字が現われたのだ。これは正面側のゲーム機に対戦相手が来たことを意味する。

「チッ、今頃来やがったか。こっちはモグラだったのに……」

利成は誰に言うともなく呟くと、キャラクターをコントロールするレバーを握り締め、臨戦態勢を整えた。

「Fight!!」

と画面から表示と音声が出て、乱入者との闘いが開始された。ガチャガチャとレバーを動かし、画面上のキャラクターに成り切る利成。しかし相手の使うプロレスラーはなかなかの強者で、今日初めて『モグラ』を使用した利成には歯が立たなかった。『モグラ』はプロレスラーに捕えられて投げ飛ばされた。

「あっ、ちくしょう!」

悔し紛れに叫ぶ利成。結局なす術なく『モグラ』はやられまくった。

「K.O」

「You lose」

「Game over」

と敗者を罵るような文字が次々と画面上に表示され、利成はゲームを続ける権利を奪われた。

「野郎、ム力ついた!本気でやってやるよ!」

ほとんど無抵抗の『モグラ』がやられたことを、まるで自分の親類でも殺されたかのように感じた利成は、怒りに任せて最後のコインを投入し、乱入した。彼は今度の使用キャラに最も得意とする空手家シロウを選んだ。そして「今に見ている」と息巻いて、画面に食い入るように身を乗り出す。

プロを勝手に自認するだけあり、利成の操るシロウは流れるような動きで相手のレスラーを圧倒する。蹴りや突きが面白いように相手に当たって利成は圧勝した。

どうだ見たか、とばかりに得意になる利成。しかしこれで憂さを晴らしたかと思いきや、再びチャレンジャーが乱入してきた。相手

のキャラはまたも先程のレスラーで、おそらく同じ人間に違いない。あれだけの差を見せ付けられながらまだ挑戦してくるのかよ、と感じた利成だが、お構いなしにバトルはスタートする。結果は当然利成の連勝である。だが挑戦者は再度挑んできた。

「おいおい、学習機能ついてないのか？」

利成は相手のあがきにブーたれた。若干イライラしてきて、相手をおちよくなるような操作をし始めた。それでも彼の勝利が揺らぐようなことはなかった。だが相手は引つ込む様子を見せない。利成に何度倒されてもしつこく挑戦して来た。

「てめえ、しつこいぞ！」

利成は画面に向かって叫ぶが全く効果はなかった。相手は負けても次々にコインを投入して乱入してくる。これが対戦格闘ゲームの鉄の掟とも言える、連続乱入法（命名は利成）である。はつきり言つて後ろに順番待ちの奴がいなくて、なおかつ注ぎ込めるコインが無尽蔵にあれば、店が閉店するまで半永久的に乱入できるのである。つまり金さえあれば負けはないことは可能なのだ。普通、そんな間抜けはまずいないだろうが。

闘いは既に15回目を迎えていた。その間、利成が空手家シロウを使つてからは一度も負けていなかった。

「バカかこいつ。もう1500円も注ぎ込んでいるぜ。こうなりや憂さ晴らしにいくらでも使わせてやるぜ」

フンフンと鼻歌気分で余裕の利成だったが、半ば相手のしつこさに辟易もしていた。しかし挑んで来る限りは金を使わせてやろうと、底意地の悪さが頭をもたげ始めていた。それが慢心に繋がったのか、信じられないことが起こった。

「何いっ！？」

何と三本勝負の一本目、利成は負けてしまったのだ。こうなると小心者の彼は弱い。恐る恐る操作して二本目は取り返したものの、三本目は「負けるかも」というプレッシャーに吞まれて縮こまってしまい、まさかの敗北を喫してしまった。

「くそっ……」

拳をガンと基盤に叩きつけた利成の眼前では空手家シロウが無残にも横たわり「Game over」の文字が踊っていた。対称的にプロレスラーが勝ち誇って「Come on!」と中指を突き立てていた。

「この野郎！ふざけんな！」

画面から相手の挑発を感じ取った利成は頭にカーツと血が昇り、無意識の内に財布から金を取り出してゲーム機に投入していた。怒った彼を嘲笑うかのように、相手のレスラーは対戦が始まって逃げまくる。空手家シロウはダッシュしてそれを追い掛ける。すると奴はいきなり方向転換してドロップキックしてきた。これがカウンターでシロウにヒット！シロウは開始早々大きなダメージを負った。レスラーは続け様に倒れているシロウを引きずり起こしてジャンプしてのパイルドライバーを決めた。

「そ、そんな……」

「K・O」の文字が利成に突き付けられる。相手もただのバカではなかった。15回も負けている内に自分なりの利成攻略法を練っていたゲームバカだった。相手は調子に乗ってきて利成を連破した。「ムムムム……」

利成は怒りを抑えることが出来ず、血管をピクピクと浮き立たせていた。このままでは辞められないという気持ちが無意識的に次の100円を財布から取り出させた。

「はあっ、はあ……」

息切れを起こす程の激闘は終わった。一時間以上も闘った結果、利成はようやく相手を帰らせることに成功した。しかしそのために自分も1500円の犠牲を払う結果となった。相手も利成の戦い方に慣れてきて一進一退の攻防となったので、負けたままでは絶対帰らんという下らない意地を張る利成は、予想外の出費を余儀なくされたのであった。

「あーっ、ちつくしょう！」

利成はゲーセンを出て開口一番、怒りの口調で叫んだ。最終的な勝利はともかく、1500円という出費は今の彼にとってかなり痛かった。ついムキになってしまったことで、一時の満足は得たものの、大局的に見て大きな損をしてしまったのだ。下手をすると購入予定のゲームソフトがさらに一本買えなくなってしまったかもしれない。

「くそっ、なんてバカなことをしてしまったんだ……」

利成は今更ながらに後悔していた。確かに相手のしつこさには腹が立っていたし、負けたまま帰ることは絶対に嫌だった。しかしまさか自分もここまで出費するなんて思いもよらなかった。

「ちくしょう、ゲーセンなんか来るんじゃないかった……」

気晴らしにゲーセンに来た筈だったのに、利成の気持ちは重くなるばかりであった。自然と漕ぐ自転車のペダルも重く感じられてきて、沈む気持ちに拍車を掛けた。

そして家に戻ると体液の悪臭が待ち構えていた。利成はとりあえず気持ちの清浄という意味も込めて部屋の掃除に取り掛かった。まずは寒いのを我慢して窓を開ける。冷たい空気が部屋に流れこむ。あつという間に狭い部屋は冷気で満たされた。利成も厚着をしているものの、震えが止まらない。彼は縮こまりながらも部屋に散らばる紙屑を透明ゴミ袋に入れて、掃除機をかけた。

「うへえ、汚えなあ……」

自分で独り言を呟くほど彼の部屋は汚れていた。よく見ると愛用のゲーム機まで埃をかぶっている。朝からの悪臭はもちろんのこと、部屋中が埃っぽい感じだった。この惨状に気付いた利成は、久し振りに大掃除に取り掛かることを決めた。積み上げられた本やゲームソフト、衣服などを一ヶ所に集め、再び掃除機をかける。ブオオーンという轟音が鳴り響き、塵や埃が吸い込まれていく。ティッシュを捨てたことや換気の影響もあってか、匂いの方も良くはならないが、悪臭も消え去っていた。約二時間の掃除はちょうどよく部屋

の模様替えにもなったようで、今までオタクの巣窟と言われても仕様がなかった所が、一般的な学生の一人暮らしの城に変貌を遂げた。「しかし綺麗になるもんだなあ」

利成は部屋の見事な変化に自分のことながら感心していた。次第に気分の良くなってきた彼は手を休めずに片付けを続けた。積み重ねられた衣類や本をテキパキと所定の位置に収める。大きな山が暴風雨によって削り落とされるかのように、積み重ねた物資が次々と片付けられ小さくなった。

「よし、これでラストだ」

利成は残された全ての物を一気に持ち上げて運ぼうとした。結構な重量にひ弱な足腰がフラついていた。ここで悲劇は起こった。

「うわっ!？」

何と利成は荷物の重さにバランスを崩し、後方に倒れてしまったのだ。バラバラと散らばる書籍やCD、ゲームソフト。しかしそんなことはどうでもいい。何よりも利成は自分の尻餅を着いた辺りで聞こえた「メキッ」という嫌な音が気になっていた。

「ま、まさか…」

利成は恐る恐るお尻を持ち上げて、その下を覗き込んだ。「ガーン!」という漫画に出てきそうな音が冗談ではなく利成の頭を駆け巡った。お尻の下には命の次に大切なゲーム機があったのだ。そしてそれは彼のヒップドロップによって無惨にも一部潰れて損傷していた。

「そ、そんな…、マジかよ…」

念のため、利成は電源を入れて動作の可否を確かめてみた。が、結果は見るまでもなかった。ゲーム機は不貞腐れたかのように全く作動しなかった。それどころか彼に対して怒ってでもいるように煙を吹きだしていた。

「うわあああ!」

利成はたまらず叫びを揚げた。悲しみのあまり涙まで流れてきた。今の彼にとってゲーム機の故障という事態はかなり痛かった。ただ

でさえ金銭的に余裕がないところへ、修理代を請求されればさらに購入予定のソフトが買えなくなる。それもこの手の自己責任による破損の修理は相当値が張るといいうのが相場だ。下手をすると新品を購入しなくてはならない可能性もあった。

善は急げとばかりに利成は電気屋へ向かった。彼は玄関の扉を口ツクもせずに家を飛び出し、手に持った小さな鍵で自転車の鍵差し込み口をガチャガチャとやって動けるようにすると、一目散に駆け出した。そのスピードは時速50km近く、常人の速さではなかった。その様子はまるでバイク乗りが「今日で終わってしまう」というような暴走りをしている感じに近かった。大げさでなく今の状況は利成にとって人生最大の危機といって差し支えないものだった。家でゲームができない、それは牢に繋がれていると同じくらいの苦痛だった。しかも金銭面の危機で『ファイナルドラゴン3』が買えなくなるかもしれない。利成は何か考えるとムシヤクシヤして頭が爆発してしまいそうだった。

### 第3回

自転車は電気屋の正面に到着した。利成は壊れたゲーム機を小脇に抱えて中に入った。

「いらつしやいませ！」

「いらつしやいませえ！」

店内から客を迎える挨拶の声が人工的にこだまする。しかし今の利成の耳にはそんなものはまるで入ってこなかった。彼は店内を見回して修理品等を受け付けする、サービスカウンターを探した。そしてそれを見付けると一目散に目的地へダッシュした。

「すみません！これ見てもらいたいんですが！」

「は、はあ！？」

利成の必死の形相に受付の店員は驚いて、半ばビビっていた。ヒゲ面のちよつといかつい顔をしたおっさんなのだが、それだけの男を尻込みさせる程の迫力が今の利成には備わっていたのだ。周りの他の店員は「何か変な奴が来た」という顔をしてジロジロと彼を見回していた。

「だからこれを……」

机に置いたゲーム機を見て、ようやく店員は状況を理解した。黙って頷くのを見て利成もやっと少し落ち着いた。そして店員は目を皿のようにしてじつくりと壊れたゲーム機を眺め始めた。見るだけ見た後、今度は電源を繋いで動作するかどうかを確かめようとする。もともとの顔の造りもあるが、点検している間、終始その店員の顔は渋かった。利成はその間無言で己れの魂にも等しいゲーム機をただ見つめていた。

「うーん……」

一通り検査した店員は開口一番唸り声を揚げた。それを聞いた利成は悪い予感的中したようにドキツとして、全身から血の気が引くような思いをした。

「ど、どうなん、ですか？」

利成はどうしようもない焦りからドモリ混じりの口調で尋ねた。

「申し訳ないけどこれは修理したら新品を買うより高くつきますね……。完全にCDを読み込む部分が破損しちゃってますから……」

地獄の死刑執行のように店員から判決が下された。その言葉が耳に入った瞬間、利成の目の前は真っ暗になり、立ち眩みがしてその場で身体がふらついた。

「お、おい、大丈夫かい、君い？」

利成の只ならぬ様子を見た店員は慌てて、心配そうに声を掛けた。しかしその声は利成には届かず、この時彼には何かのサイレンが頭の中でウォーンと音を立てているようにしか聞こえていなかった。視覚的には壊れたゲーム機と『ファイナルドラゴン3』の映像が彼を嘲笑うかのようにグルグルと回っていた。この一瞬、彼は現実世界から切り離されていた。あまりのショックによつて、現実を直視することを本能的に拒否させられたのであった。

「うわーっ」

突然、利成は叫びを揚げて電気屋を飛び出した。店員達は呆氣に取られたようにそれを見つめるだけだった。パニック状態で自転車にも乗らずに走り去る利成。わめいて走る彼の目には周囲の風景などまるで入ってこなかった。対照的に街を歩く人々は、奇声を揚げ、疾走する男を物珍しげに眺める者、気味悪がってその場を離れる者、面白がって写真を取る者など様々な反応を見せていた。ただ、如何なる人間が利成の前に立ちはだかろうと、その者は彼にとつてその辺の電柱や看板と同じ障害物に過ぎなかった。可哀想に、何も知らずに赤いランドセルを担いで下校していた少女などは、非力とはいえ成人している利成の突進を避けられずに吹っ飛ばされた。

「はあっ、はあっ……、うわあああ……」

息を切らしうめき声を発しながら走る利成。その表情は、目が血走って大きく見開かれ、鼻孔が豚のように荒く空気を発し、頬はリッポミたいに真っ赤になり、肉食獣みたく歯を食いしばっていると

いう、傍目から見ると恐ろしくも可笑しなものだった。まだ彼の頭の中には不快な映像が駆け巡り、ウォーンウォーンとサイレン音を鳴らしていた。ゲーム機同様、彼の頭からも煙が出てきそうな雰囲気だった。今や別世界の住人であり、交通ルールなんかも彼の世界には存在しない。そのため信号などおかまいなしに車道を横断する。路上にクラクションが鳴り響き、利成を避けたカローラと対向車線を走行していたベンツが正面衝突した。パトカーや救急車が急遽駆け付け、本当のサイレンがこだまして利成の頭の中以上のパニックを引き起こした。

当の利成の足は広い市民公園に差し掛っていた。ここは約3km四方の広さを持ち、市民の憩いの場として利用されている所だった。緑が多くて自然を感じさせるこの公園を、利成は何処という目的地もなく、ただ闇雲に突き進んでいく。時にはプレイヤーのいるテニスコートを横切り、また林の中を草木に絡まれながら通り過ぎたりもした。もう何km走っただろうか、彼は運のいいことによつて、当てのないゴールに到着できた。

「うわっ、冷た……！」

正氣に戻った時、利成の身体はずぶ濡れだった。彼は盲目的に『平和の泉』と呼ばれる噴水に飛び込んだのであった。ザンブリと勢いのある水を浴びて、やっと現実世界に帰ってくることができた。びしょ濡れの彼を見て、周りの人々は悲喜こもごもの表情を見せていた。恥ずかしくなった利成は逃げるようにその場から退散した。利成自身には何故自分が市民公園にいたかはよくわかっていなかった。彼が覚えているのは、ゲーム機の故障を宣告されて頭が真っ白になったところまでだった。それから如何なる経緯で『平和の泉』に辿り着いたかは全く記憶になかった。そういった訳で帰り道に自動車同士の衝突事故が発生し、人々が大騒ぎしているのを傍目に見ても、その原因が自分にあるなどということは微塵も感じていなかった。

彼にしてみればそんな訳もわからない事故よりも、壊れたゲーム

機を新調しなくてはならないという事実の方が余程重大事だった。これ以上の出費は苦しい、しかしゲーム機本体がなくてはプレイすらできない。ここにきて利成は腹をくくってゲーム機を買いに行くことにした。彼には何をおいても家でゲームができない程の辛さはなかった。

利成は一度家に戻って、濡れた衣服の着替えを済ませると、銀行で預金を降ろして、流石に先程の電気屋へ行くことは憚られたので別のゲームショップへ急いだ。恥ずかしさの為、自転車も昼間の内に取りに行くことは諦めた。

その夜、利成はいつものようにテレビの前に陣取り、買い替えた為新しくなったゲーム機のコントローラーを片手にして、画面上の世界にのめり込んでいた。そうやってゲームをしている分にはいいのだが、やはり予定外の出費による金銭難は彼の心を苦しめた。『ファイナルドラゴン3』が出るまでには買えるゲームソフトの数がこれであと1本になってしまったのだ。元は6本も買える筈だったのに、いろいろな難題により何時の間にかそれが1本になっていた。

利成は悔しさを紛らわす為、ゲームに没頭した。もし素のままですいたら（利成的に言えばゲームをしていなかったら）、今日の昼間のように買えなくなったゲーム達が頭の中に現われて、再びパニックを引き起こしかねなかった。彼は泣く泣く購入予定を変更し、三日後に『大津城240万石』というソフトが発売されるまで、ロクに表に出ず、家に籠もって麻薬のようにゲームだけに全てを捧げた。

## 第4回

三日後、髪の毛はボサボサ、ヒゲは伸び、目には隈を作って衰退した顔の男が、10時開店のゲームショップに30分前から並んでいた。他には一人として並ぶ者はなく、孤高を感じさせる男だった。その男、川口利成は今まさに『大津城240万石』を手に入れんと気合い十分に時間を待ち受けていた。

『大津城240万石』というソフトは、ゲームにより戦国時代の戦争を疑似体験できる、いわゆるウォーシミュレーションゲームと呼ばれるものだった。内容は『大津克司』という架空の戦国武将を操り、日本を統一するというストーリーで、システム的には子供の頃にやったボードゲームに近い感じのものである。ただ盤ゲームと違うのは兵士の数や武将の能力値といった数字の要素をコンピュータ（この場合ゲーム機とソフト）が処理してくれるということだ。その為、リアルな感覚で戦国時代が楽しめるのである。

こういったゲームはRPGと並んで根強い人気があり、プレイ時間も長くなることから『じっくり型』のゲーマーには大変好まれていた。利成が何本かあった候補の中からこのゲームを選んだのも、『ファイナルドラゴン3』が発売されるまでの数日間、楽しめそうだったからである。買ってから必死になってクリアを目指す男が「長く楽しむ」というのも変な話ではあるが、不思議なことにそれが『ゲーム人』利成の生き様なのである。そんな彼は主人公『大津克司』にでもなったかのように、胸を張り腕を組んで威風堂々と扉が開くのを待ち構えていた。店員の方でもただ一人待つ男を見るに見兼ねたのか、10時を前にして店を開けた。

「いらっしやいませえ…」

あまりやる気があるとは言えないような店員がレジカウンターの方から挨拶してきた。利成はそれには目もくれず、一目散に『新発売』というPOPが貼られた『大津城240万石』を見付けだして

手に取っていた。パッケージには、鎧に身を包んだ戦国武将が刀を振り上げている絵が描かれてゲームの雰囲気を示していた。利成は敵将の首でも取ったかのようにそれを持ち、レジの店員の目の前に偉そうに置いた。それを見た店員は不快に思ったのか、明らかにブスツとした表情をしながら

「ありがとうございます…」

などと言って商品のバーコードをスキャナーで読み取る。店員にしてみれば「お前の為に開店時間より早く店を開いてやったのに、何という傲慢な態度だ！」といった感じの憤りを利成に対して覚えたらしかった。

「…円になります」

利成はボソツという店員の声が聞き取れず値段がよくわからなかったが、相手の顔つきからして聞き返すのも嫌だったので一万円を出して支払いをした。店員はそれを受け取るとレジを荒っぽく打って精算して、釣り銭をレシートと共に返してきた。利成は店員の態度があからさまに自分を嫌っているのを感じ取ったため、釣り銭の額も確かめず財布の中に乱暴に入れると逃げるようにゲームを持って店を出た。そしてパニック騒動の後、電気屋から取り戻していた自転車に乗り込み自宅へ走り去った。その姿はまるで勝ち戦目前の武將に突然の事態急転が起こり、慌てて自軍の城へ退却する様を連想させた。

自分の城へ戻ってきた利成は前もって食糧も買い込んであり、『大津城240万石』をプレイするための籠城戦の構えを見せていた。家に入ると何よりも先にパッケージを包むビニールを破り開けてゲームを中から取出し、早速ゲーム機本体にセットしてプレイを開始した。ゴミ屑は放置され、先日の大掃除は早くも水泡に帰す兆候を匂わせていた。

ゲームを始めると利成はすぐにのめり込む。あつという間に部屋はお菓子の包み紙やカップラーメンの容器の残骸で荒れ果ててしまった。汚くなることで、このアパートの一室が己れの戦場であるこ

とを改めて認識させられた。彼はその中での戦いを、最も生きがいを感じる瞬間として楽しんでいた。

が、しかし彼には一つの誤算があった。彼の戦闘能力（ゲーマーとしての実力）は高過ぎた。『大津城240万石』をプレイして2日、利成は早くもゲームをクリアしてしまったのだ。確かに彼は新作を買うといつも夜を徹してそれを早く終わらせようとして必死に取り掛かる。今回もその行動パターンは同じだった。だがシミュレーションゲームの性質上（『大津城240万石』は越後の百姓から大名になって日本を統一するという目的が設定されていた）、まさか2日で終わるとは夢にも思っていなかったのだ。矛盾した思考ではあるが、利成的には一週間は掛かるだろうと見込んでいたのだ。せつかく長く楽しめると思ってた購入したソフトだったのに、あつという間の終了……。こうなると利成は新しいゲームができない辛さで禁断症状でも起こしかねなかった。ゲームクリア後、彼の額には血管が浮き出て、顔はやつれ、手足がブルブルと震え、病人のようになっていた。『ファイナルドラゴン3』の発売日までまだ10日以上もあり、彼にはとても耐えられそうになかった。しかしお金に余裕がない現況もまた事実だった。

遂にゲーム雑誌を買う余裕もなくなった利成は、本屋で立ち読みをして情報収集するしかなかった。彼の読んだ全ての雑誌が発売の迫った『ファイナルドラゴン3』の特集記事を大々的に持つてきていた。立ち読みしかできない利成の頭はその中身を素早くインプットした。それは彼の数少ない友人が「ゲームへの集中力が他の面で開花すればもつと大した人物になっているかもしれない」と感心する程の記憶力だった。圧倒的なスピードで本日発売されたゲーム雑誌の全てをむさぼり読み終えた時、利成は愕然とした。

「ち、ちくしょう…、マジかよ！」

それは買うのを断念したソフト『バカッパクエスト』がどの雑誌を見ても高評価されていたためだった。「『ファイナルドラゴン3』発売前の今年最高のRPG!」「今までにない斬新なシステム」「

練りに練られたストーリー」など、褒め文句のオンパレードなのだ。こうなると利成は自分を制御できなくなる。現実的にはそれを買う金銭的余裕はないのだが、それどころではなくなってしまう。もういてもたってもいられなくなった彼は、半ば無意識のままゲームシヨップに足を運んでいた。店の前に立った時、大きな興奮が全身を駆け抜け、もはや購入意欲の拒絶は不可能となっていた。彼は結局『ファイナルドラゴン3』を買う予定の金を使い『バカッパクエスト』を衝動買いしてしまった。

自宅へ戻ってプレイしてみると、確かに雑誌の評判通りに『バカッパクエスト』はベテランゲームマーの利成をも唸らす程の良作だった。このゲーム世界で冒険している間は『ファイナルドラゴン3』にまつわる金銭問題など忘れていることが出来た。流石に出来がいだけあって、丸五日間ゲームだけに集中する好機を得た。

しかしその行為は麻薬を吸っているのと一緒に、ゲームがエンディングを迎えてしまうと一気に現実に戻されて苦しみと襲われることとなった。まず「どうしよう……？」という心配が胸の内から吹き上げてきた。すると不安が心を支配して動悸が速くなる。次第に怒りが込み上げてきて沸点を通り越して、血が逆ったせいかめまいを起こした。そして悲しみのあまり大粒の涙が流れ出して、それが止まらなくなった。あまりにいろいろな感情が入り交じって、自分でも怒りたいのか、泣きたいのかよくわからなくなっていた。その表情は、顔面が神経痛の如く引きつり、目は真っ赤になり涙をポロポロとこぼし、鼻水が垂れてジュルジュルという音を立て、喉から口にかけてゴホゴホと咳き込むというひどい有様だった。この時の彼はさながら狂人の態を示していた。

## 第5回

どのくらいわめきもがいたか、何とか落ち着いた利成は真剣に対応策を考え始めていた。とにかく働くなりして『ファイナルドラゴン3』の価格8800円を捻出する他に手はなかった。現在の所持金は1120円。何とか8000円級の日雇いで即払いしてくれるバイトを見つけなくてはならなかった。もちろん今バイトをしているゲームセンターにも掛け合ったが、毎月20日締めめの25日払いなので『ファイナルドラゴン3』発売日の12月24日までにお金を貰うことは無理だった。『ファイナルドラゴン3』発売前日から店に並ぶことを考えると、今日はもう17日、早くバイトを探さないと手遅れになってしまう。

利成は慌てて外へ駆け出して行くと、いつも立ち読みする本屋へ向かった。自動ドアから書店内に入り、真っ先に目指したのはいつものゲーム本コーナーではなく、求人情報雑誌のコーナーだった。利成はとにかく自分の家から近くで求人募集していないか調べた。しかし長期のバイトはあっても、日雇いで一日8000円くれるような職種は電車で遠くへ行かなければ見つからなかった。日雇いの場合、交通費まで面倒見てくれる所は少ない。従って日給8000円以上のバイトでも、目標金額には達しそうもなかった。ただ運が良いのか悪いのか、ちょうど利成の読んだ雑誌の数々は先週出たものばかりで、ほとんどの雑誌が明日今週号を発売するのだった。だから彼には明日に賭けて見るチャンスが残っていた。

確かにバイト以外にも方法がない訳ではない。友達に借りるのは人徳の欠如から無理だとしても、博打や消費者金融という手も考えられた。だが危ない橋を渡つての金銭入手だけは、切羽詰まったのならともかく、今のところは避けておきたかった。実際に彼は大学で競馬で身を持ち崩した同級生を見ていた。それを考えるとギャンブルするのは嫌だったし、金融もTVや漫画で悪例を見ているので

気乗りしなかった。何よりも、金を手に入れる手段でトラブルを起こして、ゲームが出来なくなることだけは絶対にしたくなかった。翌日、利成は一番乗りでまた本屋に行って、昨日と同じコーナーでバイトを探した。

「天は我に味方せり！」

彼は思わず興奮して店内で叫んだ。いい仕事が『週刊アルバイト』に載っていたのだ。開いたページには、自転車で行ける距離で日給8000円、12月21日一日限りの掃除バイトが書いてあった。

利成は早速募集先の電話番号を頭に記憶すると、本屋を出て外の電話ボックスに駆け込んだ。ゲーム操作のように番号ボタンを押して電話がつながるのを待つ。5回程呼び出し音が鳴ると相手側の反応があった。

「もしもし？」

「あのう、『週刊アルバイト』で見た掃除のバイトをやりたいんですか？」

利成は単刀直入に話を切り出した。

「はい、12月21日の仕事ですね？」

相手も電話の来ることがある程度予想できていたようで、軽快な喋り口で応対してきた。「そ、そうです。まだ空いてますか？」

「ええ、大丈夫ですよ。やっていただけますか？」

「は、はい。お願いします」

「ではお名前とお電話番号の方をお願い致します」

「えーと、川口…利成、電話は048-466-5779です」

「お名前が川口利成様、お電話が048-466-5779ですね？」

「はい」

「それでは川口さん、21日午前9時からですがお時間の方はよろしいでしょうか？」

「ええ」

「それから場所の方はわかりでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

利成は答えながら『週刊アルバイター』に載っていた地図を思い起していた。

「では当日は現地集合ということでよろしいですか？」

「はい、よろしいです」

クスツという失笑が受話器からかすかに漏れ聞こえたような気がした。ゲームのような機械を相手にする機会が多く、対人関係をあまり得意としない利成は「よろしいです」という何とも間の抜けた敬語表現を使つて返答したことに気付いて恥を感じ、顔を真っ赤にしていた。電話だけに、相手に自分の顔が見えないことにホッとした。

「ではよろしく願います」

「こちらこそ……」

利成はそう言う受話器を置いて電話を切った。金の確保ができそうなので、何はともあれ安堵した。多少機嫌の良くなった彼はその足で家に戻って、またゲーム界にどっぷりと浸かった。

12月21日になった。利成はいつもより朝早く起きてバイトへ行く準備をしていた。時間ギリギリに目覚めた彼は、顔を大雑把に冬の冷水で洗うと、朝飯も食べずに家を飛び出した。自転車を必死に漕いで辿り着いたのはMTビルという街中にある大きなビルディングだった。今日のバイトはここで、先月までテナントが入っていた2～6Fを清掃員5名でクリーニングする仕事であった。

「おはようございます！」

ヒゲ面でこつい体格をしたリーダー格の男が皆の前に出てきて挨拶を始めた。利成や他のメンバーも形だけは神妙に聞き入っていた。一人当たり1フロアが割り当てられ、利成は3Fを任せられることとなった。早口で諸々の作業説明がなされ

「では今日一日がんばりましょう」

という掛け声の後、皆は蜘蛛の子を散らすように担当のフロアへ向かっていった。

利成は3階の広々とした空間でほうきを持ち、一人埃だらけの床を掃いていた。彼にとつてこの清掃業務は退屈な仕事であった。もちろんフロアはかなり汚れていて、それなりに一生懸命やらなくては綺麗になりそうもなかった。そんな事は自分でもよくわかつてはいるのだが、とにかくゲームだけが楽しみな彼にとつて、何の関わりもないこの作業がつまらなくてどうしようもなかったのだ。そのため自然と頭は『ファイナルドラゴン3』をプレイする妄想で満たされ、掃く手も遅くなりがちであった。

12時になると休憩時間が設けられた。気が付いてみると利成一人だけ作業が遅れ気味という状態であった。他の4人はフロアを掃き終えて床の雑巾掛けに入っていたのに、彼は未だに掃き掃除すら終わっていないかった。

「終わらない場合は最後までやってもらいますよ、それも無給でね！」

朝に皆を統率したリーダーが、利成に対して優しい口調ながらも怖い顔をして凄んだ。

「は、はい……」

利成はその迫力にヒビッて恐る恐る返事をした。怖がりの彼は休憩時間もそこそこに、早々と3Fに戻って仕事を再開することになった。とてもサービス残業して働く気はなかった。ゲームが早くしたいのに時間を過ぎてまで働いてなんかいられない、そう思った彼は珍しく雑念をシャットアウトして必死に清掃に取り組んだ。普段、力仕事をほとんどしないこともあり、一日掛かりの掃除は肉体に疲労を感じさせた。

3時を過ぎた頃には腰の痛みを覚え、かなり辛くなってきた。痛みが強まると意識も朦朧としてくる。最後には『ファイナルドラゴン3』への執念とリーダーへの恐怖心が利成の身体を突き動かしていた。彼はロボットのよう働いて、時間内に1フロアのクリーニ

ングを成し遂げた。

「ふむっ…」

最後にリーダーのチェックが待っていた。利成はこの時だけはゲームの緊張感に似たものを感じていた。彼特有の感覚だろうが「もうすぐでクリアできるか！」というワクワクした気持ちに近いものがあり、さながらリーダーはゲームの最終ボスだった。

「ま、いいでしょう。お疲れ様でした」

リーダーの口からその言葉が出て、利成はゲームクリアのような清々しさを感じた。封筒入りの現金を貰った時、単純な男である彼は心の底から嬉しさが込み上げてきて、労働の素晴らしさというものがわかったような気がしていた。清掃員各人はそれぞれリーダーのチェック後、個別に解散しており利成はその最後であった。彼は誰もいなくなったMTビルを背に「ゲームしたい」という欲望に駆られて自転車で家までずつと歩いた。

## 第6回

12月23日になった。利成は清掃のバイトが終了してからも『バカッパクエスト』のLV上げなどをしてゲームをやり続けて、たぎる心を落ち着けた。とにかく一刻も早く『ファイナルドラゴン3』をやりたくてたまらなかった。バイトで肉体を酷使したことも反動となつてゲームへの思いを加熱させていた。そのためこの2日間、ほとんど精神安定剤に近い状態で『バカッパクエスト』が使われていた。

そして23日、発売日の前日を迎えて、利成の心ははち切れんばかりに期待に胸膨らんでいた。予約が出来なかった彼は隣街にある『ベストカメラ』という当日販売する店に今日の閉店後から並ぶつもりだった。『ベストカメラ』は仕入れ数も多く、万が一、並んでいる奴が多くいても100本は入る店だった。利成は8時の閉店を待ち切れず、夕方6時頃家を出て自転車で隣街まで飛ばした。

「な、何いっ!？」

家から15分程の『ベストカメラ』に到着した時、利成は唖然とした。『ファイナルドラゴン3』用の行列場所が既に準備されており、前日にして早くも30人近い人間が列を成していたのだ。その光景を見た利成は慌てて列に加わった。前日に来て正解であった。この調子では今夜中に販売分の人数が並んでしまったことだろう。わざわざ前から数えて自分の順番を調べると、37番目だった。

とりあえず列に入ることが出来て安心した利成は、早速背負ったバックから携帯型ゲーム機を取り出してプレイを始めた。並んでいる間さえゲームをせずにはられない彼の悲しい性である。ゲームをすることによって、明朝までの長い待ち時間を我慢することができるのだ。黙々とゲームをする利成の後ろには続々と人間が来て列を作っていた。

深夜11時頃には既に80人近い人間が並んでいる大盛況だった。

流石に『ファイナルドラゴン3』は一般の週刊誌やTVなどで騒がれる怪物ソフトだけのことはあった。今回の発売による騒ぎは一種の社会現象にまでなっていて、予想売り上げ数は300万本とも400万本とも言われていた。日本全国の子供から大人までが利成程ではないが、熱狂的に『ファイナルドラゴン3』を買い求めようとしていた。

どのくらい時間が経ったのか、気付くと朝になっていた。列の人数は、果たしてそれだけの販売本数があるのかわからないが、朝になっても増えだし150人程になっていた。深夜、周りには段ボールを敷いて、持参した毛布に包まって眠る者もいたが、利成は夜を徹してマシンのようにゲームに没頭した。正直言つてこれから『ファイナルドラゴン3』をプレイするに当たって寝だめをしておきたいのはやまやまだったが、臆病な利成はもし寝たら翌朝この行列がどうなっているかということが心配で、ゲームの力を借りて眠気に耐えたのだ。彼の目は真っ赤になって充血した上、黒い隈が出来上がってパンダのようになっていた。『ファイナルドラゴン3』への執念だけが彼の身体を支えていた。

午前10時、ついに店が開いた。結局その時間まで専用の並び場があった以外、店内から何の整理も呼び掛けもなかった。かなりの人数が並んでいたが『ベストカメラ』はそれだけの本数を用意しているのだろうか怪しまれる程だった。おそらく「そこまでの騒動になるまい」とタカをくくっていたのである。その証拠に、入口を開錠した際に店員が見せた驚きの表情は尋常ではなく、明らかに大きな動揺を含んでいた。店員は慌てて人員整理を行なおうと列のたたずまいを正そうとするが、膨れあがった人数はそう簡単に統制できそうなものではなかった。これは買えなくてあぶれた者達の怒りは凄まじいものになりそうだと、利成にすら予想できた。とはいえそんなことは彼にとっては大したことではなく、100人以内にいる自分の安泰だけを感じてホッとしていた。

開店と同時に列が少しずつ前進していった。店内に前の方の人間

が次々に入って行き、しばらくすると『ファイナルドラゴン3』を購入した者達が、続々と包みを手にして外へ戻って来ていた。10分もすると、利成もレジが見える地点まで来ていた。自分の前方の人が購入を済ませる姿を見ているだけでも、彼の心はジリジリとしてきていた。かなり以前からこのゲームに期待をしていた為、目の前にあるのにその物がなかなか手に入らないのは辛かった。彼がやきもきする内に一人また一人と望みの品を手に入れて去って行った。

段々とレジとの距離が縮まり、利成は期待と興奮と軽い緊張でドキドキしていた。心音が自分の中で響き、額や脇の下から汗が流れ落ちた。だが同時に彼の頭の中は珍しく整理されてスッキリとしていた。あと少し待つことさえ我慢すれば欲しくてたまらなかった『ファイナルドラゴン3』が自分の物になるのだ。やるべき事がシンブルな分、頭だけは落ち着き払っていた。

そしていよいよ利成の前の奴の番が来た。先程落ち着いたものの、この時ほど長く感じる時間はなかった。スリした柄のジャンパーを着て黒い皮のキャップを被っている前の男は高校生くらいの年令であるように思われた。彼はレジで会計を済まして商品を手にとると嬉しそうな顔をして店から走り去って行った。

「次のお客様どうぞ！」

ついに、ついに利成の番が来た。レジから呼ばれて前に進んだ彼は表彰でもされるかのような心地で店員と相対した。

「あの『ファイナルドラゴン3』を……。2じゃなくて3です」

利成はいちいち言わなくてもいいことを口にする。行列は『ファイナルドラゴン3』を買う為の人間達で構成されており、店員達もそんなことはわかっているのである。彼の心配性な性格がうざったらしくもそうさせていたのだ。店員はそんな利成の声に耳を傾ける事無く、無造作に商品を取り出してきてレジを打った。

「9240円になります」

アルバイトなのか面倒臭そうな顔をした店員は「さっさと金を寄

こせ」とでも言いたげな表情をしていた。しかしその表情はすぐに何かを恐れるような顔に一変した。目の前で奇妙なものを見た為である。

「き、きゅうせん…にひやく…よんじゅう…えん…？」

9240円という値段を聞いた時、利成の顔はこの世のものとは思えぬ程に変化した。目は釣り上がり、鼻は曲がり、口唇は歪んで歯はギリギリと食いしばられ、顔全体が崩れかかっていた。急速に心臓が高鳴って、汗が先程以上にダラダラ流れ出した。そして頭の中がクラクラと回るような感覚に支配され始めた。利成は9100円しかもっていないかった…。

「ち、ちよつと！8800円じゃないんですか？」

利成は何とか正気を保って尋ねた。店員は利成の変貌に不気味さを感じて恐怖しつつも、毅然とした態度で

「そりゃあ定価は8800円ですけど、そこに消費税5%の440円が付いて9240円じゃないですか」

消費税！利成はその言葉を聞いて愕然とした。ガーンという音が頭の中で大きく鳴り響いた。そんな存在はとうに忘れていた。彼は今まで目先の定価8800円を集めることしか頭になかったのだ。そして必死になって稼いできたつもりだった。

「どうしたんですか？ないんですか？」

店員が意地悪そうに尋ねてくる。利成はある筈もない金を全身をまさぐって探した。もはやその顔は必死を通り越して狂気に近付いていた。涙を流しながら利成は懸命に自分の身体を搜索していた。

「オイ、早くしやがれ！」

「何やってんだ！」

「いつまで待たせんだ！」

「子供が家で待っているのよ！」

あまりに利成の時間が掛かっているの、後ろから怒号が飛び交い始めた。その声を耳にして利成の焦りは最高潮に達した。「どうしよう、どうしよう？」と考えても、咄嗟に良い方法は浮かんでは

来なかった。店員や後ろに並んでいる人々はジロジロと不審な目で利成を見ていた。もはや万策尽きたかと思いきや、利成の混乱した頭に最後の手段が浮かんだ。

「す、すいません！ひゃ、１４０円貸して下さい！お、お願いします！」

ついに利成は後ろの奴に不足分を貸してもらおうと懇願した。しかし

「すいません。僕もちょうど９２４０円しかないんです」

後ろの男は本当にすまなそうにして利成の申し出を断った。仕方なく利成はさらに後ろの人間にまで頼もうと視線を向けたが、みんなが待たせる彼に対して怒りの表情を見せており、誰一人として貸してくれそうな者はいなかった。状況を理解した利成の頭は大混乱を起こした。頭の中でいろいろなものが出現して、今の利成を嘲笑うかのようにグルグルと回っていた。

「うわああああ！」

利成はついに成す術なくなってわめきだした。店員も困った顔で対処に苦慮して、上の人間を呼びに走った。するとまもなく店の責任者と思われる人物が登場した。

「お客様、お金が足りないのですか？」

彼は物腰穩やかに利成に聞いてきた。

「あわわわわ！」

しかし利成はショックで気が動転して言葉にならない叫びを上げるだけだった。それを見た責任者は苦笑して

「申し訳ございませんがお金がないのですしたら当方と致しましてもお売り致す訳にはまいりません。お引き取り下さいませ」

と言ってお辞儀をして利成の退店を願いでた。だが利成はわめき散らすだけでその場を動かこうとしない。後方からは段々と罵声も揚がりだしてきて店内が騒がしくなってきたので恐れを為した責任者は目くばせして警備員を呼び出し、利成を強制的に摘み出した。

「またのご来店をお待ちしております」

責任者は連れ去られて行く利成に向かって丁寧にお辞儀をして見せた。予想外の行列騒動で彼も疲れていたのだ。この後、並びながらも買えなかった人間にお詫びをしなくてはならないかと思うと胃が痛くなった。いつその事利成と共に退店したい気分であった。

## 第7回

利成は警備員達に連れられて店を追い出された。もう頭の中はパニックで、何が何だか訳がわからなくなっていた。怒って泣いてわめき散らしながらふらふらと歩く彼は狂人同様だった。顔は醜く歪み、両手をブラブラと下げ、一歩一歩をわざと足音をたてるように歩いていた。そんな彼の目の前を、何やら包みを持った小学生くらいの男の子が通り掛かった。少年はこれから何か楽しみがあるかのようにニコニコとして歩いていた。その光景を虚ろな目で見た利成の頭に一つの事が喚起された。

「『ファイナルドラゴン3』…」

利成は自分が『ファイナルドラゴン3』を欲していたことを思い出していた。そしてどうあってもそれを手に入れずにはいられなくなってきた。少年の持っている品物が『ファイナルドラゴン3』であるという疑念が、利成の頭にふつふつと沸き起こってきた。

利成は『ファイナルドラゴン3』を買えなかったことで一線を越えていた。今やっているのが現実なのかゲームなのか、まるで区別が付いていなかった。彼は現在の状況を『ファイナルドラゴン3』という重要アイテムを求めるゲームのように感じていた。利成は自分の中のゲーム界にのめり込んでいた。

勇者利成は町の中を歩いていた。そして今まで自分が探し求めていた『ファイナルドラゴン3』なるアイテムらしき物を持つ少年を発見した。利成は彼に話し掛けてみた。

「もしかしてそれは『ファイナルドラゴン3』ではありませんか？」

尋ねられた少年は怪訝そうな表情をして利成の顔を見返した。結構生意気そうな面をしており、いかにも『ガキ大将』といった風格を顔に漂わせていた。

「はあ？そっただけど…」

少年は尋ねられている事の意味がよくわからず口籠もった。しかしそれが大いに関係ある利成はようやく目的の品を発見した喜びで、ファンファーレが心の中で鳴り響いていた。

「それをちよつと貸してくれないかな？」

利成は喜びに任せて理不尽な要求を申し出ていた。

「い、嫌だ！」

少年は利成にいかかわしさを感じたのかそれを拒絶した。

「勇者の頼みを拒否するこの少年はおかしい。もしや悪者ではないのか？」

もはやこの現実をゲームと感じており、そのような不可思議な考え方が脳裏に浮かんできていた利成は、プレイ中に出てきた「戦いますか？」という問いへの選択肢「はい・いいえ」に対して遠慮なく「はい」を選んだ。

『悪ガキがあらわれた！』

『利成の攻撃！』

バシッ！

『悪ガキに10ポイントのダメージを与えた』

『悪ガキの攻撃！』

ドカッ！

『利成は5ポイントのダメージを受けた』

『悪ガキは逃げ出した！』

「ちくしょう！逃げしたか」

利成は少年を殴り付けたものの、大したダメージを与えることが出来なかった。それどころか一回反撃されて脛を蹴られてしまった。利成が蹴られた脛を押さえている間に、恐れを為した少年は早々に走って逃げ去った。そのあまりの逃げ足の速さに利成は追い付けなかった。

「痛っ…、あのくそガキめ！」

少年の蹴りは思ったよりも効いた。脛がしばらく痺れる程だった。  
「ちよつと素手じゃ弱すぎるなあ。武器がないと辛いよ……。でもお金がないし……」

勇者利成は今の戦いで己れの弱さを悟った。しかしこの旅を止める訳にはいかなかった。彼は脚の痛みが引くと再び『ファイナルドラゴン3』を探した。キヨロキヨロと視線をさまよわせたのが幸いしたのか、しばらく歩くと道端で棒切れを発見した。

「よし棍棒を見付けたぞ！」

利成は大喜びでその宝物を拾い上げ攻撃力をUPさせた。そして足取りは自然と『ベストカメラ』の方へ戻っていた。そこに『ファイナルドラゴン3』を持つ敵モンスターが何匹かいるのは間違いなかった。勇者利成は意気揚揚とモンスター退治に出向いた。

『ベストカメラ』前にはまだたくさんの人々が列を作つて並んでいた。しかしその人達も何やら激昂しており、今にも店内になだれ込みそうな雰囲気だった。『ファイナルドラゴン3』を手に入れる為にここまで来たのに予想外の出来事が起こっており、利成も勇者としてこの事態を心配しない訳にはいかなかった。

「何かあつたんですか？」

利成は怒つて叫んでいる一人に話し掛けてみた。

「つたく……この店の野郎、散々俺達を並ばせといて、もう『ファイナルドラゴン3』品切れなんだとさ！だったら最初に言えっただ、この野郎！」

相手の男は『ベストカメラ』の失態に相当腹を立てており、無関係の利成に対してさえ殴り掛からんばかりの勢いであつた。

ここで勇者利成は大きな選択を迫られることになった。この暴徒達から『ベストカメラ』の店員を救うか否か、という選択を。利成は立ち尽くして数分間考えたが「いいえ」を選んだ。相手は多勢に無勢、とても勝てる見込みはないし、何よりもまず『ファイナルドラゴン3』を手に入れることが先決だった。激昂している男の様子から見てもこの場で『ファイナルドラゴン3』を入手できる見込み

はなかった。

「もう少しレベルを上げてから来よう」

利成は自分なりに勝手に理由を付けてこの場を立ち去り、『ファイナルドラゴン3』探しに邁進することに決めた。勇者に成り切っている為、調子の良い理由をこしらえたが、本音を言えば自分が『ファイナルドラゴン3』を買えなくなった元凶を助けようなどという気持ちは毛頭なかった。実際の所、キチガイになっても、そのことだけは頭の中に残っており、いつまでも根に持っていたのだ。自分が勇者でなかったらむしろ破壊したいくらいだった。

結局利成は『ベストカメラ暴動イベント』を見損ない、その隙に奪える大量のアイテムを取り損なった。どのみち今の彼のレベルでは敵（暴力男・凶悪警官などのモンスター）が強すぎて相手にならなかったけれど。彼は危険地帯『ベストカメラ』から離れて新たな旅路へ向かった。

利成は『ファイナルドラゴン3』探しを懸命に続けていた。なかなか情報も入ってこない中で、彼は必死の搜索を行っていた。

『利成は辺りを見回した』

『いたっ！』

利成は明らかに『ファイナルドラゴン3』らしき紙包みを大事そうに抱えた小学校5年生くらいの男の子を発見した。先程の悪ガキとは違い、ひ弱そうで細身の少年だった。利成は獲物を見付けたハイエナのように俊敏な動きでその少年に近付いていった。

「ねえ君、その包みって『ファイナルドラゴン3』でしょう？」

利成は勇者らしく極めて温和に尋ねた。それが功を奏したのか  
「うん、そうだよ」

少年はあっさりと中身の正体をバラした。

「ちよっとそれを私に譲ってくれないか？世界を守る為に必要なん

だ」

利成は決してフザけたのではなく真顔でそう言い放った。何時の間にか勇者利成の中では『ファイナルドラゴン3』は世界を救う為の宝となっていた。

「えっ、何それ？気持ち悪い……」

少年は利成の言葉を聞いて不気味な感じを抱いた。そして駆け足でその場を逃げようとす。 「追い掛けますか？」という質問が利成の心に問い掛けてきて、彼は迷わず「はい」を選んで少年の跡を追った。

「うわあ！」

少年は思わず叫びを揚げた。利成がダツシュして少年に追い付きその首根っ子を掴んだのだ。少年はジタバタするがさすがに大人と子供の力では差があり、利成の手から逃れることは出来なかった。

「どうだ大人しく『ファイナルドラゴン3』を渡すんだ。そうすれば見逃してやる！」

「ひえっ」

勇者に成り切っている利成には秘宝を持って逃走しようとする少年は『悪（悪ガキ）』と定義されていた。何の罪もないのに勇者利成に捕らえられた悪ガキはそれでも必死に抵抗を試みた。

「痛っ！」

少年は利成の腕に噛み付いてその手から何とか脱出した。

ガブリッ！

『利成は3ポイントのダメージをうけた』

利成は少年の行為に怒りを覚え、勇者として正義の為に戦うことを決意した。

『悪ガキがあらわれた！』

『利成の攻撃！』

『会心の一撃!』

ズガガーン!

『悪ガキに75ポイントのダメージを与えた』

『悪ガキを倒した!』

『悪ガキは宝物を持っていた!』

『利成は『ファイナルドラゴン3』を手に入れた!』

利成の棒切れを使った攻撃は少年をKOするのに十分な威力を持っていた。少年はその場にうずくまって動かなくなり、利成は彼の手から紙包みをふんだくった。そして期待通りその中身は今まで苦労して探し回ってきた『ファイナルドラゴン3』だった。利成の中で盛大なファンファーレが鳴り響いた。しかしその音響は一瞬で掻き消された。

「コラッ!何をしている!」

少年を棒で殴った利成の姿は他人に目撃されていた。何時の間にか駆け付けた警官3名が警棒を振り上げて利成に迫ってくる。

「ゲッ、悪徳警官×3か!とても今のレベルでは勝てない…。逃げるしかない!」

利成は勝ち目のない戦いだと判断すると、一目散に逃げ出した。しかし行き場はとっさには思いつかなかった。彼は目的地もないままとにかく走った。対する警官3人組は各々が別れて動きだし、利成を囲みながら捕らえようという考えのようだった。従って利成を直接追ってくる警官は一人しかいなかった。警官は利成を止まらせようと叫んだ。

「待てコラ!」

警官のくせに口汚いあたりはやはり『悪徳警官』である。「そんな奴らの命令は聞けない!」そう思った勇者利成は、警官から逃げるという行為に躊躇せず、このピンチを切り抜ける方法だけを考えていた。彼にとつて何よりもまず何処へ行くかということが重要だった。家へ戻れば一番良いのだが、残念ながら現在彼が向かってい

る方向は自宅と逆だった。となると…

「あそこしかない！」

利成は何か確信めいた考えが浮かんだようで、その足は迷う事無く一直線に何処かへ向かっていた。掃除のバイト程度でも疲れていた筈なのに、今の彼は必死に走っても息は上がらず、不思議と疲労感は襲ってこなかった。精神がブチ切れているために肉体が限界を忘れて、普段以上に動くことが可能になっているのだ。

だが日頃鍛えている警官の体力には及ぶべくもなく、まもなく利成は背中に吐く息が感じられる程の距離まで迫られた。

「もらった！」

警官が勝ち誇ったように至近距離で右手を伸ばしてきた。

『悪徳警官の攻撃！』

スカッ…

『利成は攻撃をかわした！』

「うおおお！」

利成は相手の手を運よくかいくぐると、覚悟を決めて手に持った棒を振り回した。

『利成の攻撃！』

バカーン！

『悪徳警官に30ポイントのダメージを与えた』

『利成は逃げ出した！』

利成が渾身の一撃を警官の脳天に喰らわせると、さすがに効いたのか相手はうずくまってその場で頭を抱えて転げ回った。この隙にとばかり利成は目的地に向かって逃げ去った。

「ぐうつうつ…、痛てえ…」

利成に殴打された警官は強烈な痛みに苦しんでいた。彼は弱そう

な若者の姿につい油断をして、まさに『窮鼠猫を噛む』のことわざ通りになってしまった。ジンジンとした頭痛を覚える頭をさするとヌルツとした感触が彼の手に残った。慌てて自分の手を覗き込むと、真っ赤な液体が熱を帯びてこびり付いていた。

「うわっ！」

彼は思わず叫びを揚げた。気が付くと頭からダラダラと液体が流れ出し、顔を濡らしていた。目にそれが入り込んで異様に染みた。

「血だ…、あの野郎…、許さねえぞ！」

血気盛んな若手巡査は頭部から血を流す重傷を負いながらも怒りのパワーで燃えていた。彼は出血多量で気を失いそうな状態なのに、逃がした若者を捕らえる為に無線で近隣の署に連絡を取って協力を要請した。そして力尽きるとその場にバツタリと倒れてしまった。

## 第8回

利成の足は市民公園に差し掛っていた。数分後、木々が彼を包み込み、追跡者からその身体を隠した。彼の目指す目的地はもう少しで辿り着ける所だった。警官が近付いてくる様子もないので、利成は走るのを止めて歩きに切り替えた。彼はようやく少しのんびりすることが出来て安堵した。

「勇者も楽じゃないな…」

彼は今までの苦勞を振り返りため息をついた。利成は完全に己れの虚構世界に埋没していた。

「しかし悪くない。いい気分だぜ！」

『ファイナルドラゴン3』を自分の物にながらも未だにプレイできないことへの苛立ちはあったが、それ以上に今プレイしている『ゲーム』は自分を満足させるものだった。そしてそのゲームの流れに従い、利成が行こうとしているのはあの『平和の泉』だった。

歩き続ける利成の眼前に薄い虹を映し出す巨大な噴水が姿を現わした。利成は平穩無事に『平和の泉』に辿り着けたのだ。幾分HPを減らしている利成はその回復を見込んでか、泉に頭を浸してその水を一口飲んだ。

「ふうーっ…、気持ちいいーっ！」

利成のもくろみ通り『平和の泉』に来たことで、精神的にも肉体的にもリフレッシュすることが出来た。完全回復した利成は最終目的地である自宅への帰還を開始しようとしていた。おそらくこのゲームは家に戻って『ファイナルドラゴン3』のプレイを始めることが出来ればクリアとなる筈だった。しかしそうは問屋がおりさなかった。

「そこを動くな！」

突然『平和の泉』の平和を破るような大きな声が響いた。利成が首を振って周りを見渡すと、彼の四方を警官が数名囲んでいた。元

々利成を追っていた2名に加え、彼に殴られた警官が呼んだ助っ人が到着したのだ。

「やばい悪徳警官×4か…」

利成は口では大ピンチと言いながらも、心の底では「勇者は必ず危機を脱する」と信じていた。だから警官の隙を見付けて走り去ろうとした時にも「自分は助かるだろう」とタ力をくくっていた。しかしゲームと違って現実はその甘くなかった。

『悪徳警官たちがあらわれた!』

『利成は逃げ出した!』

『しかしまわりこまれてしまった!』

『悪徳警官Aの攻撃!』

バコッ!

『利成は25ポイントのダメージを受けた!』

『悪徳警官Bの攻撃!』

『痛恨の一撃』

ズガガガガン!

『利成は128ポイントのダメージを受けた!』

『利成は倒れた…』

今度ばかりは警官が一枚上手だった。隙があるように見えたのは利成を捕らえるための罠であり、案の定そこへ走り込んだ彼は警官に囲まれた。逃げ場を失った利成は警官達によつてたかつて警棒で殴られ叩かれ、血を吹き出して地面に倒れこんだ。

「な、何だよ…、『平和の泉』って敵モンスターが出ない所じゃないのかよ…」

頭がゲームに染まりきっている利成は『平和の泉』をその名の通り『平和』な場所だと曲解していたようで、その事に対して恨み言をつぶやくと、殴打されたショックで気を失った。

## 最終回

気が付くと利成の目の前には黒い鉄棒が立ちふさがっていた。

「ここは…」

『利成は辺りを見回した』

『しかし何も見つからなかった』

鉄の棒に囲まれた冷ややかな世界。利成はようやく己れの境遇を悟った。彼は警官によって牢屋に放りこまれたのであった。

「うわあああ…」

利成は勇者のくせにどうしていいかわからずにただ叫んだ。何故自分がこんな目に会うのか本当にわからなかった。己れを勇者だと思っている彼は、全く罪の意識を感じていなかったのである。

「コ、コンティニューはできないのかよ…」

まだ今の状況をゲームだと認識している彼はコンティニュー、いわゆるやり直しが出来ないことを悟って悲嘆にくれた。

利成が牢屋に入って嘆いている頃、世間では『ファイナルドラゴン3』を巡って一つの騒動が勃発していた。累計500万本近い売り上げを記録してホクホク顔だったトライアングル社ではあったが、翌日には100万件近い苦情の電話やFAXが殺到してその表情を曇らせた。途中までゲームを進めると、画像が停止して操作不能になってしまうトラブルが購入者のあちらこちらから発生したらしい。売った数が数だけに動作異常の発生は大きな問題として取り上げられることとなった。販売数で一世を風靡したものの、トラブルでまたも社会を騒がせることになってしまったのだ。

しかも肝心のゲーム内容も薄っぺらなストーリーに美麗なグラフィックを載せただけであり、運よく最後までプレイできた人達も腹

を立てて酷評することとなった。ゲーム誌もこぞってトライアングル社批判を展開した。本社ビルには、毎日責任を追求するオタク系の抗議運動が展開され、警官が駆り出される始末だった。この一件で『痛恨の一撃』を受けたトライアングル社は一氣に世間の株を落とし、衰退していった。

「ああコンティニューができれば…」  
と社長が言ったと言わないとか…。

そんな『ファイナルドラゴン3』の事情も露知らず、川口利成は牢屋で一つの結論に達した。

「まだゲームオーバーはしていない筈だ。なぜなら俺は生きている！多分、何らかの方法でこの牢屋から脱出できるのだ！」

利成は落ち着いて考えてみることに、自分がコンティニューどころかまだゲームオーバーになっていないことを悟った。その境地に至ってからの利成はとにかく牢屋内のいたる所を探ってみることに集中した。いつか『ファイナルドラゴン3』をプレイすることだけを夢見ながら…。しかしその作業は

『利成は自分の足元を調べた』

『しかし何も見つからなかった』

『利成は自分の目の前を調べた』

『しかし何も見つからなかった』

の繰り返しだった。流石の利成も気が滅入りそうになったが、何せゲームである以上、彼が諦めることはなかった。彼は四六時中牢屋の中を調べまくった。

利成は牢屋の脱出方法が見つからないことを心配する必要は全くない。なぜなら放っておいても、もう少し時が経てば自動的にイベントが起こって、勇者利成の活躍の舞台は『精神病院』に変わるの

である。

この果てしなく長いゲーム『利成クエスト』は『ファイナルドラゴン3』を手に入れ、プレイするまで彼の中では終わらない。辞めたければ死んで、本当のゲームオーバーを迎えるしかないのだ。当然、コンティニューなどない。

しかし利成の性格からしてもゲームを放棄する筈がなかった。彼は永久に楽しむことが出来ながら、それと同時に永久に苦しむことになるのだ。本当のクリア条件である『自分探し』の冒険は自分の間終わりそうにない…。

## 最終回（後書き）

ちと恥ずかしい作品です…。よくこんなの書いたなあ…。何だか最近の某事件に通じるような感じもあって、怖いすな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4619e/>

---

WANT ~ 川口利成の12月

2010年10月8日15時36分発行